

## 調査・研究活動-2001-2002年度

雑誌名	アジア・アフリカ文化研究所研究年報
巻	37
ページ	231-243
発行年	2002
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00011311/">http://id.nii.ac.jp/1060/00011311/</a>



## 調査・研究活動——二〇〇一年度～二〇〇二年度

人口・家族・地域社会の現況調査——二五年前のアジア・アフリカ文化研究所共同調査地の変容状況の追跡調査

研究員 松 本 誠 一

期 間 二〇〇二年二月二〇日～二二日

調査地 山形県小国町

調査期間は短かったが、いささか調査の趣旨と実施に至る経緯の説明を要する。

高橋統一元アジア・アフリカ文化研究所研究員（現東洋大学名誉教授）の指導の下に構成されていた宮座の共同調査グループ（他のメンバーは清水浩昭、芳賀正明、高尾公矢、松本誠一。いずれも元アジア・アフリカ文化研究所研究員）では、契約講の共同調査も行った。その成果は「契約講の社会人類学的研究 I—山形県西置賜郡小国町市野々・大石沢の事例」（『社会人類学年報』第四巻 一九七八）、「契約講の社会人類学的研究 II—山形県最上郡および西村山郡の事例」（『東洋大学アジア・アフリカ文化研究所研究年報』第十六号、一九八二）の2篇で、計六ヶ地区を対象とした現地調査に基づいている。最初の契約講共同調査は、市野々・大石沢で行われ、一九七六、一九七七年に実施された。

調査・研究活動

それから四半世紀を経た今日、両地区そして小国町はどのような変化を  
とげているか。この当時は集落構造に主たる関心があり、小国町を広域的  
には対象としていなかった。しかし、生活圏の拡大はこの間、確実に進ん  
だであろう。また、屈指の豪雪地帯として知られるこの地方における冬季  
間の生活の現在はどうなっているのか。そして、地域生活において相互扶  
助機能のある契約講はどうなっているか。これらが今回の調査着手の前に  
あった問題関心である。当時の共同調査メンバーで研究員として残ってい  
るのは、清水浩昭研究員と私の二人だけになった。今回の調査では、大学  
繁忙期でもあり清水研究員とは現地訪問日程がずれた。

△契約講▽

とりわけ市野々地区は高橋により、さらに四半世紀前の一九五三年に調  
査されていた（村落構造の一考察—構造の『型』に関連して）『法社会学』  
一〇、一九五七）。したがって、一九七六、七年の調査自体が、それから  
二〇余年経過しての変化形態の追跡調査として企画されたものであった。  
この積み重ねの上に、一地区について半世紀にまたがる三回目の調査を実  
施することの意義を思い、その時期に至っていることを考えた次第である。  
そこで、一九七六、七年、市野々調査時に宿泊等で暖かくお世話になつ  
た渡部忠三郎氏の当時の電話番号に、二〇〇一年春に電話したら、まった  
く他家につながった。それで、NTTから小国町の電話帳を取り寄せ、渡  
部さんの名前と電話番号を探したら、町内他地区に見つかった。そこに電  
話すると、確かに市野々に住んでいた渡部さんで、実は横川ダム建設工事  
のため、下叶水地区とともに市野々地区の全戸は七、八年前に移転したの  
だという。両地区ともに水没区域に含まれるからである。

一九七七年十一月、市野々調査当時の世帯数は駐在（警察官）・分校教員を除くと、二十三世帯であったが、二〇〇〇年二月現在で作成された電話帳では九軒が元市野々在住世帯ではないかと把握された。その内、七軒が町内の同一地区に転居した様子が窺えた。引越しても再び相互に近隣に居住していれば、付き合ひも何らかの形で維持されるだろう。そうだとしても、契約講の共有財産はどうなっているのか。

#### △ダム建設と集落移転▽

一方、ダム建設の話を目にしたので、早速インターネットで調べたところ、横川ダム建設事務所が作成・発信しているホームページを見つけた。正確に水没予定区域がどこであるのか、横川ダム建設計画資料を郵送してもらった。それによると、このダムの機能は（一）洪水調節、（二）工業用水供給、（三）流量確保、（四）水力発電、と説明されている。折しも、「ダムは無駄」という問題提起がなされていた。ダムには砂等が堆積するが、堆積を放置すると埋まっていくので、貯水能力が失われ、洪水調節もできなくなる。堆積物を流すと下流の川や漁場が荒れる。それで、ダム湖を浚渫して、ダンプで運び出すことがダムの機能維持に必要であるとなると、ダム維持コストは減らず、全国合わせれば巨額になる、とあれこれ問題点が指摘されるようになっていく。長野県知事選でダム建設見直しを公約に掲げた田中康夫候補が当選し、二〇〇一年二月に知事として「脱ダム宣言」をした。ダム建設を核としての地域開発モデルを世界に示したアメリカにおいて、ダム廃止の流れがあることも伝えられる。国土交通省のサイトを探すと、アメリカの撤廃されたダムには、ビーバーの造るダムより小規模なものが相当数含まれている由の文章も見られたが、国としてもダ

ム建設のみ推進しているのではなく、ダム建設事業の中止・規模縮小が可能などところではそれを進めている。こうした時代状況の中で、小国町ではどのような影響があるのか、ないのか。

#### △除雪態勢▽

また、小国町は有数の豪雪地で、昔は山間部の集落は冬になると孤立していたという。「雪国の生活の調査は冬に来なくては分らない」と、一九七七年二月に沖縄出身の津波太一氏（琉球大、津波高志教授の弟）と共に雪の中の訪問調査を行なった。雪が降ってくれば夜でも家の出入り口の確保に除雪する苦勞を目にした。出稼ぎで婦人だけが残っている家の、かやぶき屋根の雪下ろしも体験した。渡部家ではいち早く、屋根の雪が滑落するように造られていた。その後、雪国での「克雪」「利雪」などの語句を目にするようになった。小国で除雪は今日どのようにされているのか。

私自身、この間にソウルで二冬を過ごし、摂氏零下六〇度を記録するというヤクーツクも（夏に）訪問した。また十月から五月まで雪が降ることのあるモントリオールでは、雪の結晶（スノーフレイク）が外套の袖に刺さってはすぐ壊れるのを堪能し、零下二十八度の朝も経験した。海外の寒冷地について見聞を広めたわけであるが、こうした経験を踏まえて、冬の小国をみるとどう見えるのか。

さて、二〇〇二年二月の現地調査では、校務の関係で出発時間が遅くなり、二〇日は米沢市に一泊した。

除雪関係では小国町企画課・建設課、置賜総合支庁建設部小国分所を訪問し、除雪の概況・コストなどを窺い知る基礎的な情報入手するとともに、小国町建設課の横山氏の案内により町内の除雪現場・除雪関係施設を

見学。

市野々・下叶水歴史保存会会長、高井朋次氏宅を訪問した折に、同氏宅の家庭用除雪機を実際に動かしてもらい、認識を新たにした。屋根に上がって雪下ろしはせず、自然に滑落させる家が増え、庭の雪を除雪機で堆雪場に飛ばす。昔に比べるとかなり楽になっていた。

△新集落誌の刊行▽

ダム移転世帯を出した市野々・下叶水両地区の集落誌といえるものが、地元の希望を受け入れて、横川ダム工事事務所が資金面をバックアップし、市野々・下叶水歴史保存会、渡部敏明氏、米沢・秋田の出版関係者などの手により、ちょうど二〇〇一年、二〇〇二年にわたり、以下の四編として発行された。入手希望の向きは、北陸建設弘済会坂町支所に照会されたい。奥付や箱に市販価格はついていない。

国土交通省北陸地方整備局横川ダム工事事務所監修、市野々・下叶水歴史保存会編集・制作『ふるさとへの想ひー市野々・下叶水』社団法人・北陸建設弘済会坂町支所、二〇〇二 平成一三年一〇月三十一日発行。全一〇八頁。

(構成)

- 一 市野々・下叶水の概要
- 二 村の歴史
- 三 暮らし
- 四 年中行事と祭り
- 五 教育と文化

調査・研究活動

六 産業

七 交通

八 寺社と信仰

市野々・下叶水歴史保存会『ふるさとへの想ひー市野々・下叶水』VHSビデオ、平成一四年一月発行。

市野々・下叶水歴史保存会『ふるさとへの想ひー市野々・下叶水』CD-ROM、平成一四年一月発行。マックにも対応。

(構成)

地域概要

地域概要

村の歴史

古代、中世、近世、明治時代から現代、主な出来事

暮らし

人の一生、冠婚葬祭、住居、冬の暮らし、食べ物、遊び

年中行事

村の歳時記、神送り・虫送り・百万遍、市野々・下叶水の祭り

教育と文化

叶水学校、市野々分校、基督教独立学園高等学校と下叶水、社会教育、

村医師、契約、物語・村の決めごと、民話・言伝え

産業

農業、養蚕業、向原の開田、水出し、炭焼き

交通

越後街道、中津川街道と子持峠の道、仙野街道、鉄道

寺社と信仰

飛泉寺・子易地藏尊、済広寺、市野々熊野神社、下叶水石動神社、村の神仏、庚申講と講中参り、石碑

自然・環境

水利、植物、動物

家と家族

家と家族（全戸）＊市野々は大正十二年頃、下叶水は昭和一〇年頃の家並図が掲載されている。各戸別の説明はない。

資料編

資料・写真 ＊photo フォルダに写真はない。

『ふるさとへの想ひ―市野々・下叶水―家と家族』社団法人・北陸建設弘済会坂町支所、平成一四年三月二三日発行。全七二頁。

（構成）

一 市野々編

二 下叶水編

三 思い出のアルバム

一と二には、家並みの図、各世帯ごとに家屋と家族の記念写真、家の歴史について談話または手稿を編集した記事が掲載されている。三は両地区の古い写真が三三葉、収められているが、説明が付いていないので、各写真の影像情報は関係者でないと分からない。

二〇〇二年七月一日、渡部忠三郎氏は病気のため逝去された。この紙面を借りて謹んで哀悼の意を表したい。なお、子息の茂雄氏は郵便局勤め

から、農業に転じ、山形県きのご振興会主催の山形県きのご品評会で、二〇〇一年に県知事賞、二〇〇二年に林野庁長官賞を受賞し、雑穀の試験栽培にも力を注いでいる。

#### 注

1 契約講調査研究はこの後、高橋統一・今泉信雄・崔在律ほか「契約講の伝統と変容―岩手県和賀町の調査から」（『東洋大学アジア・アフリカ文化研究所研究年報』第二四号、一九九〇）、高橋統一「村落社会の近代化と文化伝統」（岩田書院、一九九四）の第二章「農村の近代化と文化伝統―岩手・和賀の契約講」へと継続された。

2 昭和四十二年羽越水害ではこの流域で、死者・行方不明者が九〇名に及んだ。

3 鈴木暁彦・山口博敬「ダムが寸断 『死んだ』川」（『朝日新聞』二〇〇二年十一月十八日）では、小国町の東芝セラミックスがもっている赤芝ダム（一九五四年完成）の「堆砂率六七・七％」（二〇〇〇年度国土交通省調べ）で「堆砂率の高いダム五〇」に含まれている。

4 「揺れるダム計画」（『朝日新聞』二〇〇二年八月十一日）では、財団法人・日本ダム協会「ダム年鑑」を引用しながら、「国が中止を決めたダム」九十二、「計画・建設中のダム」一一三のリストを伝えている。

5 小国町に鉄道で行く場合、山形県の米沢駅と新潟県の坂町駅を結ぶJR米坂線を利用するしかないが、米沢から小国には1日6本しか運転されていない。

人口・家族・地域社会の現況調査——二五年前のアジア・アフリカ文化研究所共同調査地の変容状況の追跡調査

研究員 清水 浩 昭

期 間 二〇〇二年二月二日～二六日

調査地 山形県小国町

今回は、人口・家族・地域社会の変動に関する現況を人口高齢化と核家族化の進展に伴う老親扶養の変化に焦点をあてて調査を実施した。

その調査内容は、以下の通りである。

#### 一 人口と家族に関する資料調査

『数字でみる小国町』山形県小国町企画課、平成十三年四月、『過疎地域自立促進計画（前期計画）』山形県小国町、『白い森の国研究会報告』先端山村研究所、平成九年二月等を収集するとともに、小国町の過疎・高齢化に伴う町の総合計画の変遷についての調査をしてきた（情報提供者、企画課長補佐・舟山忠夫氏、企画調整課主査・山口英明氏）。

#### 二 老親扶養に関する調査

豪雪地帯小国町は、「冬里夏山構想」（冬季は里で生活し、夏季は山で過ごすという構想）のもとに高齢者が冬季の厳しい時期には里で生活できるような施策を策定し、その施策のもとに「癒しの園」（保健・医療・福祉施設の統合地域）を建設した。この施策の実施状況とその施設で生活している方々に生活の様子を伺ってきた（情報提供者、健康福祉課介護福祉係長・井上伊勢男氏、調整主査兼地域福祉係長・岩沢ちか氏、小国町老人保健施設「温身の里」庶務係長兼相談指導員・伊藤優子氏）。

今回の調査は、予備調査の段階に留まった。次回以降は、収集してきた調査資料、聞き取り調査の分析結果を踏まえた本格的な調査を実施したいと考えている。

# 西南中国（広西・雲南）の少数民族調査

研究員 谷 口 房 男  
研究員 飯 塚 勝 重  
研究員 菊 池 良 輝  
研究員 佐 藤 三千夫

期 間 二〇〇二年八月二日～八月一日

調査地 中華人民共和国 南寧市、昆明市、麗江市、大理市

目 的 ①『華陽国志』現代語訳注作業を進めていく上での地理的景觀と歴史理解のため。

②広西民族学院民族学人類学研究所の諸先生および広西壮族自治區博物館前館長・蔣廷瑜氏らとの面会および現地の人との意見交換のため。

③関連資料の収集のためなど。

④なお今回の調査旅行に参加した各人は、それぞれ個別のテーマをもって臨んだ。

谷口…西南中国の少数民族とくに壮（チュアン）族・納西

（ナシ）族

菊池…『華陽国志』南中志の世界

飯塚…西部大開発と少数民族社会

佐藤…広西・雲南の考古発掘

概要 八月十二日朝十時に成田を発ち、午後一時半ごろ広州空港に到

り、さらに飛行機を乗り継ぎ南寧に向い、夕刻に南寧のホテルに着き、今回の十日間の調査旅行が始まった。この間、主として広西と雲南の自然地理の景觀と名所古蹟や少数民族の居住する村および観光地などを見学し、併せて大学及び博物館を訪ねて研究者等との意見交換を行った。とくに南寧では広西民族学院を訪問し、謝崇安教授及び民族研究所副所長らと面談するとともに、多くの図書資料を寄贈された。

昆明では雲南大学を訪問した。なにしろ夏期休暇中でもあり、面会を予定していた歴史系の林超民教授（副学長）は、急遽会議で昆明を離れられ、日程の調整ができず、残念ながらお会いすることができなかった。ただ同大学構内には清代の貢院が保存されており、貴重な遺物を見学することができた。また西南地域の民族調査概要を示す展示室などを見学した。

この間に南寧および昆明・麗江・大理で見学した主なところを挙げれば、まず南寧では楊美古鎮であり、清末に科挙に合格した漢民族の集落を見学したことである。このほかに当地で最も代表的な鍾乳洞である伊鈴岩を見学した。

昆明では西山風景地区の竜門石窟を見学し、また石林や民族村などを見学した。さらに昆明の南に位置する晋寧に赴き、一九五〇年代半ばに発掘された滇王墓で有名な石寨山遺跡を見学した。その帰路に岩画（新街鎮・大理時期・毘沙門天）を見学した。しかし付近の晋城鎮には鄭和公園があったが、時間の都合で見学できなかったのは残念である。なお清初に呉三桂が建立した名城・

金殿も見学した。

麗江では虎跳峡、石鼓、長江第一湾などを見学した。ただこの時期は雨期にあたり、玉竜雪山は雲間にあって全くその姿を現さなかったのが残念だ。ここ麗江は納西（ナシ）族の集中居住地域であり、麗江納西族博物館を訪ねた。ここではとくにナシ民族の伝統的な東巴（トンパ）文字に関する資料を買い求めた。さらに麗江古城・四方街・木府などを見学した。

大理では白族民居（嚴氏住居・三道茶）をはじめ藍染工場・大理石工場を見学し、また大理古城・三塔などを見学した。

成果 広西・雲南両省の主な都市を飛行機とバスで、長距離を飛び交う十日間の調査の旅であった。この間、歴史的な名所古蹟をはじめとして、壮（チュアン）族や納西（ナシ）族および白（ペイ）族の村などを見学し、また広西民族学院および雲南大学と各地の博物館を訪問して意見交換するなど、大きな成果をあげることができた。さらに考古遺跡や多くの名所旧蹟を見学した。僅か十日間の旅ではあったが、こうした成果を今後の研究にいかすとともに、とくに『華陽国志』現代語訳注作業を進めていく上に役立てていきたい。三国時代蜀漢における諸葛孔明が経営に苦心した南

中の地形を、長江第一湾を中心とする長江沿いから大理へのルートを通過実見するなど、とりわけ当該地域の地理的景観を具に見ることができたことは、大変に有意義であった。

旅程 今回の調査旅行の日程は、以下の通りであった。

八月二日（土）

一〇…一〇 成田発 JD八二七便

一三…一五 広州着

一五…三五 広州発 CZ三三三二便

一八…一〇 南寧着

三日（日） 八…〇〇 酒店出発

広西民族学院訪問

謝崇安教授および民族学人類学研究所副所長等との面会

楊美古鎮見学

清末 客家出身進士楊美の故郷とその村

伊嶺岩見学

四日（月） 七…三〇 酒店出発

広西壮族自治区博物館

蔣廷瑜前館長・覃義生副館長と面談、銅鼓などの展示品を閲覧

一〇…五〇 南寧空港発 CZ三四五九便

一二…二五 昆明空港着

西山風景地区 竜門石窟見学

五日（火） 八…三〇 飯店出発

七彩雲南・石林・藍染工場見学

六日（水） 八…三〇 飯店出発

石寨山遺跡

一九五〇年代半ばに発掘された滇王墓見学

岩画（新街鎮・大理時期・毘沙門天）を見学

\*付近の晋城鎮に鄭和公園あるも見学できず

昆明市民族茶道館、昆明市博物館見学

七日（木） 八…三〇 飯店出発

雲南民族村見学

雲南大学訪問

清代の貢院を見学

金殿（吳三桂）見学

八日（金） 七…一五 飯店出発



七・四〇 昆明空港着

八・四五 昆明空港発 3Q四四一七便

九・三〇 麗江空港着

虎跳峡、石鼓、長江第一湾見学

九日(土)

八・三〇 大酒店発

麗江納西族博物館着

麗江古城・四方街・木府見学

一三・五五 麗江出發 バスで大理へ向かう

一七・五〇 大理到着

大理市街散策

十日(日)

九・〇五 大酒店発

白族民居(嚴氏住居・三道茶) 見学

藍染工場・大理石工場見学

大理古城散策、三塔見学

納西族画家・趙氏宅訪問

六・四〇 大酒店発

七・〇五 大理空港着

一〇・三〇 大理空港発 CZ四七四四便

昆明空港着

一四・二〇 昆明空港発 JD八九八便

二〇・二五 成田空港着

## 台湾と沖縄における伝承遊戯の比較研究

研究員 比嘉 佑典

期間 二〇〇二年一月一日～一月十八日

調査地 沖縄県 那覇市、具志川市、沖縄市、名護市

一月一日（水）三時三十分（JAL）那覇着

午後、沖縄県立図書館を訪問、台湾の玩具関係の図書の検索・調査及び資料を収集した。台湾の民間伝承玩具、特に独楽やタコの文献を中心に収集した。

一月一日（木）、午前中は県立博物館（首里）を訪問。「沖縄の子どもの遊びの世界展」（数年前開催）に関する資料と図録（二種類）等収集すると同時に、沖縄の玩具と台湾の玩具等について聞き取り調査を行った。午後からは、博物館の紹介で、沖縄国際大学南島文化研究所を訪問。聞き取り調査を行ったが、台湾及び南島地域の研究者不在のため、資料のみの収集に終わった。ここでは主に玩具の背景にある民俗文化に関する資料を入手した。

一月十五日（金）、具志川市の市民劇場を訪問。何度か開催された台湾の人形劇を中心に、沖縄の人形劇の最近の近況を調査した。午後から、沖縄市で「NPO法人・沖縄児童文化福祉協会」の松本淳事務局長を訪問。同協会が毎年行っている「ユッカの日」（旧暦五月四日）玩具祭り（沖縄の伝承行事の復活）について、インタビュー調査を行った。

一月一六日(土)、沖縄人形劇団(現在約一六劇団)の数名の方々と懇談会を行った。それは、沖縄女子短期大学の児童教育学科の鎌田先生の紹介によるものである。人形劇フェスティバルを中心に、調査を行った。

一月一七日(日) 名護市済井出に所在する、沖縄唯一の台湾人形劇を演ずる、人形劇団「かじまやあ」を訪問。桑江純子団長から、台湾の人形の情報を収集。桑江さんは、台湾で二年間台湾人形劇ボーテイジでの修行の経験があり、貴重な資料を収集することができた。

一月一八日(月)、那覇市小祿の古波蔵保文(郷土玩具製作者・故人)の息子宅を訪問、故人の製作・収集した玩具を見学させてもらった。

二〇時(JAL)で帰着。

### 幼児教育普及に伴う人形観の変容に関する資料収集

研究員 是 澤 博 昭

期 間 二〇〇二年一月一三日～二月二一日

調査地 長野県須坂市 (財)田中本家博物館

### 調査対象

長野県東部地方、いわゆる東信濃地方の旧家田中家の資料を中心に、その周辺地域の商家が所蔵する人形玩具類と、同地区の主な博物館(長野県立歴史館・上田市立博物館・須坂市立博物館・笠鉾会館・世界の民俗人形博物館・須坂クラシック美術館)を調査した。

今回の調査の中心は、田中家の子女が使用した明治・大正期の子ども生活用品、特に人形玩具類である。十代目当主にあたる女子(明治二十七年生まれ)とその妹(明治三十二年生まれ)、また十一代目当主の男子(大正八年生まれ)の使用した、子供用品及び玩具、雛や五月の節句飾りなど、明治中期の女子と大正中期の男子の、時代が特定できる人形玩具類が保存されている。

その多くは三越をはじめ東京のデパートから購入されたものであり、しかも同家にはその際使用された、明治・大正期の『三越タイムス』(三越)、『流行』(白木屋)などの通信販売用のカタログが残っている。

### 田中本家博物館の概要

田中本家博物館は、江戸時代中期享保年間から続く須坂藩御用達商人であった田中家代々の生活にかかわる品々を保存・公開している博物館である。

江戸時代から明治期に建てられた土蔵二〇棟が、三千坪の敷地の四方を取り囲み、屋敷内には前庭、中庭、天明年間作庭の大庭があり、母屋をはじめ豪華な建物が軒を連ねている。展示館は土蔵五棟を改装したものであり、年五回の企画展をおこなっている。

同館の収蔵品は土蔵に収蔵されており、空調や除湿をおこなわないにもかかわらず、保存状態はきわめて良好である。所蔵資料は陶磁器、漆器、書画をはじめ衣裳・人形・玩具類など多彩であり、当時の豪商の生活水準をうかがわせる資料ばかりである。

### 田中家資料の意義

子どもの健やかな発達とその知的発達を促進させるために、都市部の新

中間層や地方の富裕層に、欧米の子ども用品を取り入れようという機運が高まるのは、明治三〇年代である。やがて、明治四〇年代から大正期にかけて「子どもの用品の教育的な改良」が商売として定着するまでになる。

特に、明治四二年に設立される「三越」の「子ども部」や「児童博覧会」「児童用品研究会」の役割は大きい。その中心的な役割を担ったのが児童文学者巖谷小波と後に東洋大学一三代学長となる高島平三郎であった。

明治の終わりから大正にかけて、近代的な諸制度が名実ともに社会に定着すると、日本でも「子ども期」が誕生する。この頃、玩具も「(学校教育上)役にたつか、立たないか」「教育的か、非教育的か」で判断され、優良玩具・低俗玩具という選別がおこなわれていく。つまり「玩具」子どものためのもの」という考えかたが支配的になり、近代的な教育制度の普及とともに、日本の伝統的な人形・玩具観も大きく変化する。

そもそも江戸時代の人々は、子どもの発達を促すために玩具を与えたいという発想がなかった。ところが、明治に入り「遊びをとおして教育する」という幼児教育(フレーベル思想)が紹介されることで、日本人がこれまで知らなかった遊び、楽しみながら能力をたかめる「教育玩具」、すなわち「新しい玩具観」に出会うのである。幼児教育の普及とともに日本人の意識の中に浸透していく、「玩具」＝「子どもの発達に深いかわりもつ」という「玩具観」が日常の生活に組み込まれていく過程は、近代的な教育観を日本人が内面化していくことと、どこかで重なるであろう。

同家の人形玩具類は、それまでの過程を文献と実物から実証的に跡付られる稀有な資料群である。日本における幼児教育の普及過程を考察する上で、貴重な資料が得られた。

#### 東信濃地方の節句に関する資料

同館には田中家代々の雛人形約二五〇点のほか、その関係文書として雛の領収書や雛祭の料理の献立などが残っている。それらの文書を閲覧した。その後、先ごろ長野県立歴史館で開催された「開設四百年 中山道・信濃二十六宿と間宿」の担当学芸員小野和英氏を訪ね、東信濃地方の交通史についてご教示いただいた。

また上田市立博物館では、江戸時代後期の同地方の子どもの初節句の祝儀帳の調査に携わる研究者に面接し、意見を交換した。そして、同地方の雛人形に関する文書・資料を調査・収集した。この成果は、平成一五年度に開催される同博物館主催の「ひな人形」展にいかされることになり、同展の図録に論文を寄稿し、同市で記念講演をおこなう予定である。